

小さな診療所の出来事 4

船橋ファーム・アシスト・サービス
獣医師 船橋 史憲

特殊肉生産を目的とした長期飼育農場(平均75日齢で出荷)で抗コクシジウム剤を除外した、低蛋白質・低エネルギー飼料で飼育しているところでは時々鶏コクシジウム病の発生がみられます。

この農場では3日齢に日生研の鶏コクシ弱毒3価生ワクチンTAMを使用していました。極稀に血便が見られましたが、ほぼ順調に推移していました。昨年(2010年)の7月15~23日は猛暑のため35~41日齢の一週間で150羽(飼育羽数の約3%)ほどの熱死がありました。

その後、やや涼しくなりほっとする間もなく死亡鶏が増えたため、直ちに病性鑑定の依頼に応じて現地にて、腸病変の特徴からアイメリア・ネカトリックスによる亜急性鶏コクシジウム病と診断し、52日齢より4日間サルファ剤の投与を指示しました。その結果、図1のように投薬終了の翌日から死亡数は減少しましたが、10日間ぐらいは通常より多くの死亡数があり、300羽強(6.7%)に達し、猛暑より被害が大きくなってしまいました。

8月6日入雛群から鶏コクシ弱毒3価生ワクチンTAMと鶏コクシ弱毒生ワクチンNecaを同時に飼料添加してからは発症もなく、暑さの影響も無く順調に経過しています。この群からコクシジウムのワクチンの定着率を上げるため、ワクチン投与後の10日間はやや狭く飼い、その間はガードの拡張は止め、敷き料は少なめにして、その間の補充も避けました。ワクチン投与後10日目の13日齢に検査したところ、OPGは50,000個を示し、良い結果でした。9月26日(51日齢)までのデータを図2に示しました。死亡鶏は少なく、経過は良い状態です。

図1 長期飼育肉用鶏での死亡状況

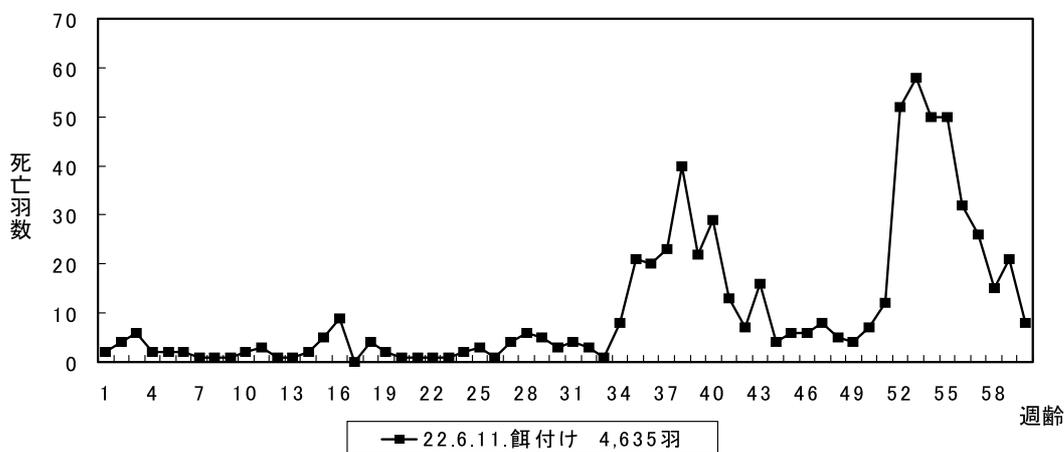


図2 鶏コクシワクチンTAM・Necaを投与した群

